

かさこそ森の 気どりやキツネ

有島 なさ・作 北見葉胡・絵



かさこそ森の 気どりゃキツネ

有島なさ・作
北見葉胡・絵

常州大字山書館
藏 書 章

作・有島なさ（ありしま なさ）

1974年、滋賀県生まれ。現在、介護職員として勤務している。本作で2012年、静岡県浜松市主催第4回森林のまち童話大賞を受賞。今後も家族や友人との心のつながりをえがいた物語を書いていきたいと考えている。

憧れの作家は、安房直子と梨木香歩。静岡県在住。

絵・北見葉胡（きたみ ようこ）

武蔵野美術短期大学卒業。おもな絵本に『タマリシとポチロー』『なつねこ』（ともに講談社）、『そらの木』『絵本・グリム童話』シリーズ全5巻（ともに岩崎書店）、『リトル・レトロ・トラム』（理論社）、『ねっこばあのおくりもの』（ポプラ社）、書籍装画に「安房直子コレクション」全7巻（偕成社）、『ヒットラーのむすめ』（すずき出版）など。2004年にヨゼフ・ヴィルコン記念大分国際絵本原画展優秀賞受賞、2005年にボローニャ国際絵本原画展入選、2009年『ルウとリンデン 旅とおるすばん』（講談社）ボローニャ国際児童図書賞受賞。東京都在住。

かさこ^{もり}森^きの気どりやキツネ

2012年11月 第1刷

作 者 有島なさ

画 家 北見葉胡

発行者 坂井宏先

編集 松永 緑 荒川寛子

装丁 岩田里香

発行所 株式会社ポプラ社

〒160-8565 東京都新宿区大京町22-1

振替 00140-3-149271

電話 03-3357-2216（編集）

03-3357-2212（営業）

0120-666-553（お客様相談室）

FAX 03-3359-2359（ご注文）

ホームページ <http://www.poplar.co.jp>

ポプラランド <http://www.poplarland.com>

印 刷 瞬報社写真印刷株式会社

製 本 株式会社ブックアート

©2012 Nasa Arishima Yōko Kitami Printed in Japan

ISBN978-4-591-13130-5 N.D.C.913 63p 21cm

乱丁・落丁本は送料小社負担でお取り替えます。

ご面倒でも小社お客様相談室までご連絡ください。

受付時間は月～金曜日、9：00～17：00（ただし祝祭日はのぞく）。

読者の皆様からのお便りをお待ちしております。いただいたお便りは、編集局から著者にお渡しいたします。本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

本書は第4回静岡県浜松市森林のまち童話大賞・大賞受賞作です。

かさこそ森の 気どりゃキツネ

有島なさ・作
北見葉胡・絵



かきこそ かきこそ

かきこそ かきこそ

太^{たい}くんの家^{いえ}のにわで、大^{おお}きなえだをひろげたクヌギの木^き

が、朝^{あさ}の風^{かぜ}に、葉^はっぱをゆらしています。

太^{たい}くんのおとうさんが生^うまれるまえからあるクヌギの木^き

は、風^{かぜ}がふくたびに、かきこそと葉^はっぱをゆらします。

かきこそ かきこそ

くすくす あははは

「あれ？ だれかわらった？」

葉^はっぱの音^{おと}とセミの声^{こゑ}にまじって、子^こどものわらい声^{こゑ}がきこ

えたような気^きがして、太^{たい}くんはまどから顔^{かお}をだしました。



でも、にわにいたのは、太一たいいちくんのおばあちゃんだけです。

「なんだ、おばあちゃんか……。なにしてるの？」

「太一たいいち、おはよう。かきこそその木きに、朝あさのあいさつをしていたんだよ。ほら、カブトムシがたくさんきているよ」

おばあちゃんは、にわのクヌギの木きを「かきこそその木き」とよんで、だいじにしています。

「ほんと？ やったー！」

太一たいいちくんが、まどからにわにでようとすると、

おばあちゃんは、

「おやおや、太一たいいち、くつをはいてきなさい」

と、わらいながら、かきこそその木きをなでました。



夏休みがはじまったばかりのある日、おとうさんが、夕ごはんを食べながら、とつぜんいいました。

「じつは、転勤がきまったんだ」

「てんきんって？」

「はたらく場所がかわることだよ。おとうさんがはたらいいてる会社が、あたらしい工場をつくったのは、まえに話したよね」

「うん」

「おとうさんは、その工場ではたらくことになったんだ」

「ここから、かようの？」

「ここからは、電車で二時間くらいかかるから、ひっこさなくちゃならないんだ」

「だから、太一^{たいいち}は転校^{てんこう}しなくちゃならないのよ。

二期^{がっき}からね」

おかあさんがそういうと、

太一^{たいいち}くんは、大きな声^{おおこえ}でいいました。

「そんなの、やだ！」

「太一^{たいいち}……」

「ぼく、ひっこしなんか、しない。

友矢^{ともや}くんたちと、あそべなくなるもん」

ようちえんのときからなかよしの、友矢^{ともや}くん、ミキちゃん、

直^{なお}くん。一年^{ねん}一組^{くみ}でなかよくなった、ヒロシくん、夕子^{ゆうこ}ちゃん

……。いろんなともだちの顔^{かお}が、つぎつぎ、うかんできます。





「しかたないんだよ、しごとだからね」

おとうさんは、太一^{たいち}くんにいいました。

すると、おばあちゃんがいいました。

「わたしなら、ひとりでだいじょうぶだから、三人^{にん}でいきなさい」

「おばあちゃん、いっしょにいかないの？ どうして？」

太一^{たいち}くんは、びっくりしました。

「ここには、じいさんのおはかも、畑^{はたけ}もある。だれかがそのせわをしなきゃいけないだろ」

おばあちゃんは、にこにこしながらお茶^{ちや}をのみました。

「いやだ！ じゃあ、ぼくもひっこさない！」

「太^{たい}一^{いち}……」

「ぼくも、おばあちゃんといっしょに、ここにいる」

おとうさんとおかあさんは、こまったようすで、顔^{かお}を見^みあわ

せました。

「ありがとう、太^{たい}一^{いち}。でも、おばあちゃんはだいじょうぶだよ」

「え？」

「おばあちゃんは、ひとりぼっちじゃないからね」

「どういうこと？」

太^{たい}一^{いち}くんは、首^{くび}をかしげました。

でも、おばあちゃんは、

「しんぱいしないよ。さて、ごちそうさま」

両手^{りょうて}をあわせて、そういうと、自分^{じぶん}のへやへといってしま
ました。



つぎの日から、さつそく、ひっこしのじゅんびがはじまりました。

おとうさんは、あたらしくすむ家をきめて、太一くんの転校の手つづきをしました。

「こんどの学校は、大きいから、ともだちがたくさんでできるぞ。たのしみだな。それに、海がちかいから、休みの日につれていてやるからな」

はじめてひっこしをするおとうさんは、まるでりょこうにくみたいに、たのしそうです。

「家は、まだあたらしくて、ぴかぴかなのよ。それに、にわもひろいんですって。よかったわね」

おかあさんも、なんだかうれしそうに、にもつをダンボール
につめていきます。

でも、太^{たい}一^{いち}くんは、あたらしい学校^{がっこう}も、あたらしい家^{いえ}も、ちつ
ともたのしみじゃありません。



夕ゆうごはんのあと、太たい一いちくんが、ひとりでえんがわにすわって
いると、

「どうした、太たい一いち？ そんなこわい顔かおをして」

おばあちゃんが、となりにすわりました。

「ぼく、ひっこし、したくない。おばあちゃんといっしょに
いたい。おばあちゃんだって、ほんとうはさびしいでしょ？」

「おばあちゃんは、ほんとうにだいじょうぶだよ」

「でも……」

「おばあちゃんには、あの木きがついていてくれるからね」

おばあちゃんは、にわのかさこその木きを見みやりました。

かさこその木きは、たくさんはの葉はをゆらして かさこそかさこ